

第36回 宮日出版文化賞

優れた出版物を顕彰する「第36回宮日出版文化賞」（宮崎日日新聞社主催）は「〈現在美術〉批評Ⅰ」（石川千佳子著、忘羊社）、「高千穂の山腹用水路ガイド」（竹下伸一著、鉦脈社）の2冊に決まった。また、「若山牧水全歌集」（伊藤一彦著、角川文化振興財団）に特別賞を贈る。3作品の書評と受賞者の喜びの声を紹介する。

委員長	田中利砂子（南九州大短期大学部准教授）
委員	楠田剛士（宮崎公立大人文学部准教授）
委員	田畑久美子（宮崎子どもと本をつなぐネットワーク世話人）
委員	海野由憲（県立図書館長）
委員	吉岡智子（宮崎日日新聞社編集局長）
（敬称略）	

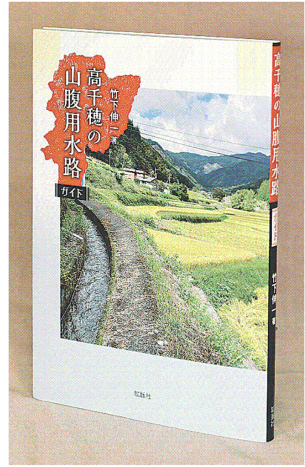
高千穂の山腹用水路ガイド

竹下 伸一著（鉦脈社）



「用水路を造った人、管理する人に思いを持って現地を探究しえたら」と語る竹下伸一さん

高千穂町の棚田に水を供給する山腹用水路の魅力を紹介する観光ガイドブックを出版した。10年にわたる調査の成果を多くのカラー写真を添え、平易な言葉で丁寧に解説している。「研究の集大成を評価してもらえうれし。作ってよかったと笑顔を見せる。



集大成 評価うれしい

京都府生まれ、父の転勤のため小学2年で新富町へ。小学6年から高校卒業までは宮崎市佐土原町で過ごした。現在、宮崎大農学部准教授で専門は農業における水資源の循環を研究する「農業水文学」。命を育む水に興味を持ったのは子どもの頃、一ツ瀬川で釣りをしていて、「水はなぜなくなるのかわからないのか」と疑問を持ったからだ。愛媛大に通った学生時代には自転車での日本一周を経験。各地の農業研究者らとネットワークを構築できたことが今の研究にも役立っている。「全国の棚田を見た体験が、後に高千穂の山腹用水路の独自性に気付く目を養ってくれた」

（中村和彦）

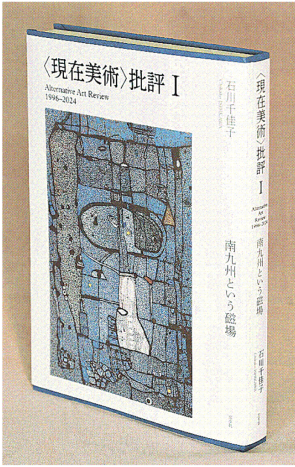
〈現在美術〉批評Ⅰ

石川千佳子著（忘羊社）



「筆が及ぶ限りは書き続けたい」と話す石川千佳子さん（西脇寛撮影）

「宮崎に批評の空間を創りたい」という当時の担当者の思いに共感した著者が、本紙「アートこらむ」を中心に約30年間書き継いできた批評などをまとめた。宮崎大に移る傍ら、訪れた展覧会は年間150。南九州管内はもちろん、時に都内まで足を延ばし、個展から総合公募展まで丹念に拾い上げている。本質に切り込む筆致の裏には、批評への耐性が脆弱な地方に甘んじることなく、県内の美術シーンをより高めへ引き上げたいという思いがにじむ。



作品発信へ強い思い

来年には続編「Ⅱ」を刊行し、シリーズを完結する予定。背中を押してくれた批評家2人の言葉を胸に「後任を探しつつ、筆が及ぶ限りは書き続けたい」。

かなければ」との思いが勝つていたという。ウェブ上のやり取りが中心となった昨今は「非難の応酬が増える中で、まっとうな批判的言説へのアレルギーも強まり批評全体が地盤沈下した」と感じている。一方で、自身の批評を糧に新境地を開く作家の存在に勇気づけられている。

選考委員 書評

海野由憲委員
本書は単に用水路の成り立ちや機能を解説したガイドブックではない。高千穂町の農業を支えてきた先人たちが、幾多の困難を乗り越え、長い年月をかけて山々と田畑に巡らせた用水路の旅へと誘う、ロマンあふれるガイドブックである。農学博士である著者が、

田畑久美子委員
世界農業遺産に認定された高千穂郷・椎葉山地域には、美しい棚田の風景が広がっている。その景観を支えているのが、総延長約500キロにも及ぶ「山腹用水路」である。本書を通して私は初めてこの水路の存在を知った。山の斜面に沿って造られた

田中利砂子委員長
よい評論は、読者の内に連想の波紋を生じさせる。混じりつけない青色の表紙は、筆者の冷徹なまなざしの象徴のようだ。『現在美術』とは、「すでに権威づけられたものよりも、それまで取り上げられないことの少なかつた挑戦的な作品」と筆者は言

楠田剛士委員
美術館が独自に所蔵する作品をコレクションと呼ぶが、本書は石川千佳子氏が新聞等に載せた美術批評を集成（コレクト）したものだ。約30年にわたって書かれた批評が年代順に並ぶ。順路に従って読み進めれば、宮崎の現代美術史をたどることができる。

地域の熱意や絆実感

現地を丹念に調査し、山腹用水路ならではの魅力が堪能できる九つのコースを紹介している。山奥の岩山を削って作られた用水路、棚田の中をゆつたりと流れる用水路、街中を下から上へ流れる用水路など、場所や季節によってさまざまな顔を見せる用水路の写真が、全ページフルカラーで掲載されている。さらに地図や航空写真で見学コースや見どころポイントを確認することもできる。

高千穂の険しい山間部を貴重な一冊である。

「水路守る努力」表現

用水路は、先人たちの知恵と努力の結晶である。重機もない時代に、険しい山中で水を引く仕組みを築いたことに驚かされた。本書では、水路の歴史や構造だけでなく、見どころも写真や地図とともに分かりやすく紹介されている。特に「水路明えポイント」は親しみやすく、水路に詳しくない人でも楽しく読むことができる。実際に現地を歩いてみたくなった。また、山腹用水路は田畑を潤すだけでなく、洪水の

冷徹な視線 表紙象徴

「現在美術」とは、「すでに権威づけられたものよりも、それまで取り上げられないことの少なかつた挑戦的な作品」と筆者は言う。本書は、読者の内に連想の波紋を生じさせる。混じりつけない青色の表紙は、筆者の冷徹なまなざしの象徴のようだ。『現在美術』を論じるに、時系列に並べられた時、伝統の枠から徐々に解き放たれる南九州の美術という絵が浮かび上がる。伝統は、新たな表現を追求する芸術の「よりどころ」になるが、時として「足かせ」にもなる。活動を根付かせするためには、その現場が地方都市ともなれば、なわばらである。筆者は四半世紀にわたり、伝

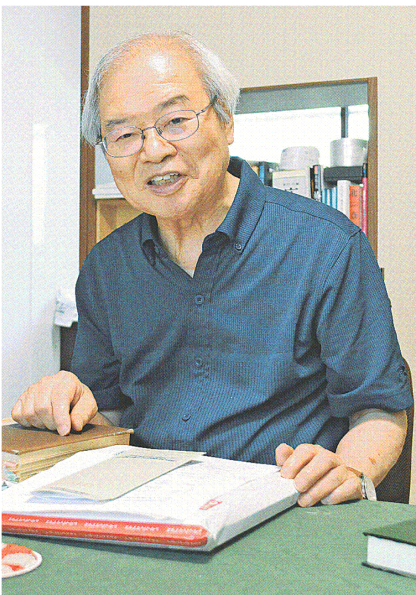
躊躇しない姿勢一貫

文章は研究者としての鋭い言葉と、一般読者に向けた平易な言葉との絶妙なバランスで成り立つ。作品や展示の新しい可能性に目を凝らし、問題点を挙げる者の技は、見事というほかない。本書に登場する美術家は有名無名を問わずかなりの数にのぼる。Ⅱが出版される際には、Ⅰも含めた人名索引が付くことを期待したい。宮崎にゆかりのある美術家の人名録として、長が、同年の新収蔵作品展で初披露されたことがわ

特別賞

若山牧水全歌集

伊藤 一彦著（角川文化振興財団）



「世界は対立と分断が進んでいる。そうしたものを超えて人や自然に親しむ『親和性』を牧水は基本としている。牧水文学に価値

「調べ」研究今後も

「思いがけない受賞。こういう形で評価されるのは本当にうれしい」と喜ぶ。牧水の水全集出版は、研究者の大倍法利雄が1975（昭和50）年に出版して以来、50年ぶりだった。「大倍法の水全集は、貴重だが、絶版になっている間違ひもある。新しく見つけた歌もあり、生誕140年に間に合うように作った」と語る。



「牧水論」精選し収録

書評

宮大教育学部 中村佳文教授



「生誕一四〇年記念出版若山牧水全歌集」は、ここに始まる」を帯文に掲げた一冊である。2025年刊行のもう一つの意図は、門人として直接に牧水を支えた大倍法利雄の『若山牧水全歌集』（短歌新聞社）刊行から50年の節目であることだ。当該書の誤りの訂正が施され、未収録歌を含む約9600首を収録したのが本書である。大倍法の前書にない特長は、編著者が丹念に精選した「若山牧水論」12編を収録することだ。川端康成「若山牧水氏と湯ヶ島温泉」や、編著者の手になる本書は、牧水を「未来の人」として次世代に伝える文化史的価値が高い基礎文獻である。

網・本林勝夫・稲田定雄・島内景子として大岡信という、各時代を代表する詩歌人の牧水への想いや評価がまとめて読める。特に大岡の文章は「第1回若山牧水賞受賞式記念講演」（1997年1月）を元としており、本県としても記念碑的な意味を持ち真の牧水像の理解を促す。中世の歌人藤原定家が、平安朝の古典を多く書写したことで後の古典研究が進んだように、編著者の手になる本書は、牧水を「未来の人」として次世代に伝える文化史的価値が高い基礎文獻である。